

第3調

「スポタ」の大晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十句を立てて、主日の讚頌を歌ふ。第三調。

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。

ハリストス救世主よ、爾の十字架にて死の權は滅され、悪魔の誘惑は空しくせられ

第三調 「スポタ」の大晩課 四九五

第三調 「スポタ」の大晩課 四九六

たり。信を以て救はるる人の族は恒に歌を爾に奉る。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

主よ、爾の復活にて萬有は照され、樂園は再開されたり。悉くの造物は爾を讃め揚げて、恒に歌を爾に奉る。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

我は父及び子の能力を崇め。聖神の權を歌ひ、分れず造られざる神性、一體の三者、世世に主たる者を讃め揚ぐ。

又アナトリーの讚頌、同調。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

ハリストスよ、我等爾の尊き十字架に伏拜し、爾の復活を歌頌讚榮す、蓋爾の傷に因りて我等皆癒されたり。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

我等は童貞女より身を取りし救世主を歌ふ、蓋我等の爲に十字架に釘せられ、三日目に復活して、我等に大なる憐を賜へり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

ハリストスは降りて、地獄に在る者に福音して曰へり、勇めよ、今勝てり、我は復活なり、我死の門を破りて、爾等を上げん。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

ハリストス神よ、我等爾の至淨なる家に立つに堪へざる者は晩の歌を奉りて、深き心より籲ぶ、爾の三日目の復活にて世界を照しし人を愛する主よ、爾の民を爾の諸敵の手より脱れしめ給へ。

他の讚頌、至聖生神女に捧ぐ、月課經の讚頌の無き所に之を歌ふ。アモレイのパワエルの作、第七調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

童貞女よ、我何事に遇ひても爾の神聖なる恩寵を呼ぶ者に慈憐を垂れて、速に聴き給へ、蓋我が靈の望を一切爾に負はせたり。我萬事に於て爾の神聖なる慮を待む、爾我に將來の光榮及び神聖なる生命をも獲しめ給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

生神女よ、我が諸慾の炭は我の中に燃えたり。祈る、女宰よ、怒と憤、沉湎と邪淫、貪婪と頑固、怠惰と煩悶、驕慢と良心に戻る事より吾が靈を脱れしめて、我を救

第三調 「スポタ」の大晩課 四九七

ひ給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。
我等皆潔き良心を以て生神女の前に俯伏して、心の内より絶えず呼ばん、聖なる女宰
よ、我等衆を愠怒と忿恨、災禍と誘惑より救ひ給へ。蓋我等は爾を垣墻及び保固とし
て獲て、爾の帡幪の下に趨り附きて、爾に依りて救はる。

光榮、今も、生神女讃詞。

最尊き者よ、我等如何で爾が神人を生みしに驚かざらん。至りて玷なき者よ、爾は夫
の誘を受けずして、世の無き先より母なく父より生れ、聊かも變易、或は混淆、或
は分離を受けず、二の性の質を全うして守れる子を父なく身にて生めり。故に母、童貞女、
女宰よ、正しく爾を生神女と承け認むる者の靈の救はれんことを彼に祈り給へ。

次ぎて香爐捧持の聖入。「穩なる光」。提綱及び聯禱。

挿句に主日の讃頌、第三調。

己の苦にて日を晦くし、己の復活の光にて萬物を照ししハリストス、人を慈む主よ、
我等の晩の歌を納れ給へ。

他の讃頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。
主よ、爾が生命を施す復活は全世界を照して、爾の朽ちたる造物を興せり。故に我等
アダムの詛を脱して呼ぶ、全能の主よ、光榮は爾に歸す。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。
爾は變易せざる神にして、身にて苦を受けて變易せり。造物は爾が十字架に懸れるを見
るに堪へずして、恐懼に由りて變じ、欺息して爾の恒忍を讃め揚げたり。爾は地獄に降
り、三日目に復活して、世界に生命と大なる憐とを賜へり。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。
ハリストスよ、爾は我が族を死より救はん爲に死を忍び、三日目に死より復活して、爾
を神と識認せし者を己と偕に復活せしめて、世界を照し給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

爾は種なく聖神に由りて、父の旨を以て、神の子、世の無き先に母なく父より生れし者
を妊み、我等の爲に父なく爾より在りし者を身にて生み、嬰たる者を乳にて養へり。彼
に我等の靈を諸難より脱れしめんことを息めずして禱り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に、

主日の讃詞、第三調。

天に在る者樂しめよ、地に在る者悦べよ、主は其臂の力を顯して、死を以て死を滅し、
復活の首となり、我等を地獄の腹より救ひ、世界に大なる憐を賜ひたればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神童貞女よ、我等は爾我が族の救の爲に轉達する者を讃め歌ふ、爾の子吾が神は人
を愛するに因りて、爾より取りし身にて十字架の苦を受け、我等を滅亡より救ひたれ
ばなり。

主日の早課

六段の聖詠の後に、

「主は神なり」に主日の讃詞、第三調、「天に在る者樂しめよ」。光榮、今も、生神女讃詞、「生神童貞女よ、我等は爾我が族の救の爲に」。次に常例の聖詠の誦讀。

第一の誦文の後に主日の坐誦讃詞、第三調。

ハリストスは寝りし者の初實として死より興き、造物に先だちて生れし者、萬物を造りし主は、我が族の朽ちたる性を己の内に改め給へり。死よ、爾は已に君たらず、萬有の主宰は爾の權を破りたればなり。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる勿れ。主よ、爾は身にて死を嘗めて、爾の復活にて死の苦を斷ち、人を之に勝たん爲に固めて、初の詛を敗らしめ給へり。我が生命を衛る主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神女よ、ガウリイルは爾が童貞の美しきと爾が潔淨の光れるとを奇として呼べり、如何なる爾に適ふ讚美を爾に獻げん、如何に爾を名づけん、我訝りて驚く。故に命ぜられし如く爾に呼ぶ、恩寵を蒙れる者、慶べよ。

第二の誦文の後に主日の坐誦讃詞、第三調。

主よ、地獄は爾の變易なき神性と自由なる苦とに驚きて、哭きて言へり、我不朽の肉體の合成に慄く、見えざる者が竊に我と戦ふを見る。故に我が執へたる者も呼ぶ、ハリストスよ、光榮は爾の復活に歸す。

句、主よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。我等信者は十字架に釘せらるることの測り難き、復活の言ひ難き神聖なる奥義を傳ふ、蓋今死と地獄とは虜にせられ、人類は不朽を衣たり。故に我等感謝して爾に籲ぶ、ハリストスよ、光榮は爾の復活に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

第三調 主日の早課 五一七

第三調 主日の早課 五一八

生神女よ、爾は父および聖神と一體なる測り難く像り難き主を奥密に爾の腹に容れ給へり、我等は爾の産に由りて聖三者の惟一なる混淆せざる能力を世界に讚榮せんことを悟れり。故に感謝して爾に呼ぶ、恩寵を蒙れる者、慶べよ。

「ネポロチニ」の後に應答歌、第三調。

顯現にて驚かし、言語にて慰むる光明の天使は攜香女に言へり、何ぞ生ける者を墓に尋ぬる、墓を空しくせし者は興きたり。彼が朽壞を變へて親ら變らざる者なるを悟りて、神に謂へ、爾の所爲は何ぞ驚くべき、人の族を救ひ給ひしに因る。

品第詞、第三調。第一倡和詞、毎句復唱す。

言よ、爾はシオン^{イバコイ}の虜をワフィロン^{アンティフォン}より引き出せり、我をも諸愆より生命に引き寄せ給へ。

南風の時に神聖なる涙を以て播く者は、喜を以て永生の穂を刈る。

光榮

聖神には凡の善き賜は屬す、蓋彼は父及び子と偕に輝き、萬物は彼に頼りて生き且動

く。 **今も、同上。**

第二 倡和詞。

若し主諸徳の家を造らずば我等 徒に勞す、主 靈を蔽はんに、誰も我等の城を破らざらん。
聖神の腹の果たる諸聖人は、父の子なると均しく、恒に爾 ハリストスの子なり。

光榮

聖神に藉りて一切の聖事、一切の智慧は洞察せらる、蓋彼に縁りて萬物は生存す。我等父及び言に於けるが如く彼に務めん、其神なればなり。

今も、同上。

第三 倡和詞。

主を畏れて 誠の道を行く者は 福なり、生命の諸果を食はんとすればなり。
牧師長よ、爾の諸子が善業の枝を持ちて、爾の席を環れるを見て、樂しめよ。

光榮

聖神より凡の光榮の富は出で、彼より凡の造物に恩寵と生命とは賜はる。故に彼は父及び言と齋しく歌はるるなり。

今も、同上

提綱、第三調。

第三調 主日の早課 五一九

第三調 主日の早課 五二〇

諸民に言ふべし、主は王たり、故に世界は堅固にして揺かざらん。

句、新なる歌を主に歌へ、全地よ、主に歌へ。

「凡そ呼吸ある者」。句、「神を其聖所に讃め揚げよ」。主日の早課の福音經。

「ハリストスの復活を見て」。第五十聖詠。其他常例の如し。

主日の規程、第三調。

第一歌頌

イルモス、昔神妙の瞬にて水を一區に匯め、又イズライリ人の爲に海を分ちし者は、是れ崇め讃めらるる吾が神なり。我等獨彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

土を擬定して、罪を犯しし者の爲に汗の果として荆棘を出すことを命ぜし主、法に戻る手より身に於て荆棘の冠を受けし者は、是れ吾が神なり。彼は詛を滅し給へり、光榮を顯したればなり。

苦に與る生ける身を受けしに因りて死を懼れし者は、死に勝ちて之を破る者と顯れたり、是れ吾が神なり。彼は殘虐者と戦ひて、衆人を己と偕に復活せしめ給へり、光榮を顯したればなり。

生神女讚詞

萬族は爾種なく生みし者を眞の生神女と讚榮す、蓋爾の聖にせられし腹に降りし者は是れ吾が神なり。彼は我等の爲に我等に肖たる者と爲りて、爾より神及び人として生れ給へり。

又十字架復活の規程、第三調。

第一歌頌

イルモス、人人よ、童貞女より我が救の爲に生れて、地の物を天の物と一に爲しし主に新

なる歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。
罪を愛する殘虐者に奴隷とせられし人類を、ハリストスは神聖なる血を以て贖ひ、之を
新にして神成し給へり、光榮を顯したればなり。
生命の寶藏たるハリストスは死に屬する者として甘じて死を嘗め、性の不死なる者とし
て死者を生かし給へり、光榮を顯したればなり。

又至聖なる生神女の規程、其冠詞は、生神女よ、我第三の歌を爾に奉る。第三調。

第一歌頌 イルモス同上

童貞女よ、天上の凡の性は地上の者と偕に、地獄の者も、宜しきに合ひて、爾より身
を取りし主の前に膝を屈む、彼光榮を顯したればなり。
少女よ、大なる哉爾に藉る和睦や、神として豊に諸恩を施す主は爾より身を取り

第三調 主日の早課 五二一

第三調 主日の早課 五二二

て、神聖なる神を我等に賜へり、光榮を顯したればなり。

共頌、「我が口を開きて」。

第三歌頌

イルモス、言にて造られ、聖神にて備へらるる萬物を無より出しし至上なる全能者よ、爾
の愛に我を固め給へ。

ハリストスよ、爾の十字架を以て不虔者は辱しめられたり、蓋 阱 を掘り、之を竣へ
て、自ら其中に陥り、謙卑の者の角は爾の復活に藉りて擧げられたり。

人を愛する主よ、聖教の傳道が諸民に廣布するは水の海に溢るるが如し、蓋 爾は墓よ
り復活して、聖三者の光を顯し給へり。

生神女讃詞

永遠に王たる主の活ける城邑よ、光榮の事は爾に於て傳へられたり、女宰よ、爾に藉り
て神が地上の者と偕に居りたればなり。

又

イルモス、主宰ハリストス、我等の防固よ、爾は力を以て敵の弓を折り、盾を壊り給へ
り。主よ、爾は聖なり。

至淨なる十字架よ、爾は邪教の汚穢の潔淨と現れたり、蓋 至りて神聖なるイイススは爾
の上に手を舒べ給へり。

生命を受けし墓よ、我等衆信者は爾に伏拜すべし、蓋 ハリストス我が眞の神は爾の中
に葬られて、復活し給へり。

又 イルモス同上

ハリストスよ、預言者の言ひし如く、イエッセイの根よりせし杖たる童貞女は爾花たる者
を我等の爲に發き給へり。主よ、爾は聖なり。

地に生るる者を神に體合せしめん爲に爾は童貞女より我等の肉體を受けて、貧しくなり給
へり。主よ、爾は聖なり。

第四歌頌

イルモス、主よ、爾は強き愛を我等に顯せり、我等の爲に爾の獨生子を死に付したれ
ばなり。故に我等感謝して爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

ハリストスよ、爾は慈憐に因りて瘡痕と毀傷とを受け、頬を批つ陵辱を忍び、恒忍にし

て唾せらるるを堪へ、此等を以て我が爲に救を成し給へり。主よ、光榮は爾の力に歸す。

至榮なる生命よ、爾は貧しき者を苦より、乏しき者を嘆より救はん爲に、死に屬する身にて死を受け、壞りし者を壞り、衆人を己と偕に復活せしめ給へり、光榮を顯

第三調 主日の早課 五二三

第三調 主日の早課 五二四

したればなり。

生神女讃詞

主ハリストスよ、爾の苦にて獲たる牧群を記念し、爾の至榮なる母の慈憐なる憐れを受け、迫害せらるる者を顧みて、爾の力を以て之を救ひ給へ。

又

イルモス、人を愛する主よ、爾の誕生の奥義は奇異にして言ひ難し。我爾の風聲を聞きて懼れ、且樂しみて爾に呼ぶ、光榮は爾の力に歸す。

人を愛する主よ、爾は己の像に循ひて人を造り、髑髏の處に十字架に釘せられて、其罪を犯すに因りて死せしを救ひ給へり。

主よ、爾墓より復活せしに、死は其呑みたる死者を還し、地獄の朽壞せしむる國は破られたり。

生神女讃詞

潔きマリヤ、黄金の香爐よ、聖三者の一なる神言は混淆なく爾の内に降り、身を取りて世界を薫らせ給へり。

又 イルモス同上

神聖なる智慧の測度を以て山を建てし主宰よ、爾は石として山たる童貞女より人の手に由らずして研られたり。人を愛する主よ、光榮は爾の力に歸す。

主宰言よ、爾は我等の病める性を醫し給へり、之に童貞女の内に於て最良き効能ある薬料たる爾の至淨なる神性を合せしを以てなり。

童貞女より身を取り、人と爲りて我に體合せし主言よ、爾は私の分なり、我が望む所の嗣業なり。

第五歌頌

イルモス、爾萬物を造りし主、悟り難き平安に、朝の禱を奉る、爾の誠は光なるに因りて、我に之を教へ給へ。

義を以て全地を審判する見ざる所なき主よ、爾はエウレイ人の媚嫉に因りて不義なる審判者に付されて、古のアダムを定罪より脱れしめ給へり。

死より復活せしハリストスよ、爾の十字架の勝たれぬ力を以て爾の平安を爾の諸教會に與へて、我が靈を救ひ給へ。

生神女讃詞

永貞童女よ、爾は獨萬物の中に容れられざる神の言を容れて、天より至りて宏き聖なる幕と顯れたり。

又

イルモス、人を愛する主よ、爾は見えざる者にして地に現れ、悟り難き者にして甘じて人人と偕に居りたり。我等朝の禱を奉りて爾を讃め歌ふ。

第三調 主日の早課 五二五

嗚呼我がハリストスよ、爾は戈を以て脅を刺されて、人の肋骨より造られ、衆人の滅亡の縁由と爲りし者を詛より解き給へり。
性に於て父と同一なるハリストス、我が救世主よ、爾は至淨至尊なる爾の肉體の聖にせられし殿を死より復活せしめ給へり。

又 イルモス同上

童貞女よ、神の言たる爾の子、始めて造られしアダムの造成主は爾より己の爲に生ける身を造りたれども、造物に非ず。
童貞女よ、父と同一なる神の言たる爾の子主イイススは二性に於て完全なる一位、全き神及び人たるなり。

第六歌頌

イルモス、今を限の罪の淵は我を圍み、我が靈は及びんとす。祈る、主宰教導者よ、爾の高き手を伸べて、我をペトルの如く救ひ給へ。
主宰よ、爾の仁慈なる降臨に因りて、慈憐と洪恩との淵は我を圍めり。蓋爾は身を取り、僕の形を受けて、我を神成して、己と偕に光榮を獲しめ給へり。
殺す者は殺されし主の生かされたるを見て、死に服せり。ハリストスよ、是れ爾の復活の表式、爾の至淨なる苦の勝利の記號なり。

生神女讃詞

智慧に超えて獨造成主及び人人の轉達者と爲りし至淨なる者よ、爾の子が罪を犯しし爾の諸僕に慈憐を垂れて、援助を施さんことを祈り給へ。

又

イルモス、イオナは地獄の住所に居る形像と爲りて呼べり、人を愛する主よ、我が生命を淪滅より引き上げ給へ。
爾は傷を受けて、地獄に傷つけられし者を十字架の苦に因りて己と偕に復活せしめ給へり。故に我爾に呼ぶ、人を愛する主よ、我が生命を淪滅より引き上げ給へ。
ハリストスよ、地獄の門は恐懼に因りて爾の爲に啓かれ、敵の器は劫さる。故に女等は爾を迎へて、悲に易へて喜を受けたり。

又 イルモス同上

形なき者は不朽なる童貞女より我等に肖たる身を受け、形及び物體と爲りて、神性を易へずして人と現れ給へり。
至淨なる者よ、我を諸罪の淵及び諸慾の烈風より脱れしめ給へ。蓋爾は信を以て爾に趨り附く者の爲に港なり、奇跡の淵なり。

小讃詞、第三調。

慈憐なる主よ、爾は今墓より復活して、我等を死の門より升せ給へり。今アダムは樂しみ、エロは歡び、諸預言者は列祖と偕に絶えず爾の權柄の神聖なる能力を讃め歌ふ。

同讃詞

天地は今樂しみて、同心にハリストス神を讃め歌ふべし、彼が囚へられし者を墓より復活せしめしに因る。萬物皆喜びて、萬有の造成主及び我等の贖罪主に宜しきに合ふ歌を奉

けだしかれ いまいのち ほどこ しゅ ひとびと じごく のほ てん あ てき ごうまん おと おのれ
る。蓋彼は今生命を施す主として、人人を地獄より升せて天に擧げ、敵の傲慢を墜し、己
の權柄の神聖なる能力を以て地獄の門を破り給ふ。

第七歌頌

イルモス、昔敬虔なる三人の少者をハルデイの焔に涼しくせし如く、我等をも神性の明
るき火にて輝かし給へ、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると呼べばなり。
造物主の十字架に釘せらるる時、殿の美しき幔は裂けて、聖書に隠れたる眞理を信者に顯
せり。故に彼等呼ぶ、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

ハリストスよ、爾の脅の刺されしに、爾は、定制に由りて、地に滴る生命を施す神聖
なる血の点滴を以て、地より造られし者を改め造り給へり。故に彼等呼ぶ、吾が先祖の神
よ、爾は崇め讃めらる。 聖三者讃詞

我等信者は善なる神を父及び獨生の子と偕に讃榮し、三位の中に唯一の元、唯一の神性を
尊みて呼ばん、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

又

イルモス、驕れる苛虐者は少者の玩具と爲れり。蓋彼等は七倍燃されたる焔を塵の如
く履みて歌へり、主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。
日は十字架に懸れる者の凡庸の人に非ずして肉體を取りし神なるを見て晦みたり。我等彼
に歌ふ、主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。
地獄は神性の堅固なる主、不朽を賜ふ者を受けて、恐れて義者の靈を吐き出せり。蓋
彼等呼べり、主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

生神女讃詞

至淨なる者よ、潔き心を以て爾を神の母と承け認むる者り爲に爾は祝福の最尊き
寶藏と顯れたり、蓋爾より我が先祖の神は身を取り給へり。

又 イルモス同上

第三調 主日の早課 五二九

第三調 主日の早課 五三〇

光榮の主、天上の軍を其權内に持つ者、父と偕に坐する者は童貞女の手にと抱かる。主
我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

死は猛烈なれども、爾に附きたれば、爾之を滅せり、童貞女より神性に合せられたる身
を取りたればなり。主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

我等皆爾神を生みし者を生神女と知り、三者の一位、爾より身を取りし者を生みた
ればなり。至淨なる者よ、爾の腹の果は祝福せられたり。

第八歌頌

イルモス、敬虔の範たる少者は堪へ難き火に入れられしに、焔に惱まされずして、神聖
なる歌を歌へり、主の悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

爾の十字架の髑髏の處に樹てられしに、殿の裝飾は裂かれ、造物は恐懼に由りて傾き
て歌へり、主の悉くの造物は主を崇め歌ひて、世々に彼を讃め揚げよ。

ハリストスよ、爾は墓より復活して、木に縁りて誘はれて陥りし者を神聖なる力を以
て改め給へり。故に彼呼びて云ふ、主の悉くの造物は主を崇め歌ひて、世々に彼を讃
め揚げよ。

生神女讃詞

しじょう かみ はは なんじ かみ でん い すまい およ やくひつ あらわ なんじ ぞうぶつ しゅ ひとびと
至淨なる神の母よ、爾は神の殿、活ける居處、及び約匱と顯れたり、爾は造物主を人人
と和げ給へり。我等悉くの造物は宜しきに合ひて爾を歌ひて、萬世に崇め讃む。

又

イルモス、敬神の少者は無形の火にて物質の火の焰を滅して歌へり、主の悉くの造物
は主を崇め讃めよ。

神の言は苦を受けざりき、神の性は苦に與らざる者なればなり、神は人體にて苦
を受け給へり。我等彼に歌ふ、主の悉くの造物は主を崇め歌ひて、世々に彼を讃め揚げ
よ。

救世主よ、爾は死に屬する者として寝ね、不死の者として復活して、歌ふ者を死より救
ひ給ふ、主の悉くの造物は主を崇め歌ひて、世々に彼を讃め揚げよ。

聖三者讃詞

われら けいけん いだ さんい しんせい い がた あわ もの ほうじ うた しゅ ことごと
我等は敬虔を抱きて三位なる神性、言ひ難く合せらるる者に奉事して歌ふ、主の悉くの
造物は主を崇め歌ひて、世々に彼を讃め揚げよ。

又 イルモス同上

なんじ はは わけい ひんい こ かみ ちか たま おんちよう こうむ どうていじよ われら なんじ
爾は母として無形の品位に超えて神に近くなり給へり。恩寵を蒙れる童貞女よ、我等爾
の産を祝讃して、萬世に崇め讃む。

第三調 主日の早課 五三一

第三調 主日の早課 五三二

なんじ ほんせい かび いた うらわ そのかがやき しんせい にくたい おんちよう こうむ どうていじよ
爾の本性の華美は至りて美しくして、其輝煌は神性の肉體なり。恩寵を蒙れる童貞女
よ、我等爾の産を祝讃して、萬世に崇め讃む。

次ぎて生神女の歌、「我が靈は主を崇め」、附唱と共に、「ヘルワイムより尊く」。

第九歌頌

イルモス、神に適ふ新なる奇蹟や、主は顯に童貞女の閉せる戸を通り、入るときは無形
の神にして、出づるときは人體を衣たる者となり、戸は元の儘閉せり。我等彼を神の母と
して、言ひ難く崇め讃む。

神の言よ、爾造物主が木に擧げられ、神が諸僕の爲に身にて苦を受け、氣息なくして墓
に臥し、死者を地獄より解き給ひしを見るは畏るべき哉。故にハリストスよ、我等爾を
全能者として崇め讃む。

ハリストスよ、爾は死者として墓に置かれて、列祖を死の朽壞より救ひ、生命の花を發
きて、死者を復活せしめ、人の性を光に導き、神聖なる不朽を之に衣せ給へり。故に我
等爾を永在の光の泉として崇め讃む。

生神女讃詞

じゅんけつ もの なんじ かみ でんおよ ほうぎ あらわ しじょうもの これ い おつと なんじ うま
純潔なる者よ、爾は神の殿及び寶座と現れたり、至上者は之に入り、夫なく爾より生
れて、爾の體の門を啓かざりき。故に潔き者よ、爾の息めざる祈禱を以て諸敵を速
に我が皇帝に服せしめ給へ。

又

イルモス、潔き者よ、我等は爾の至淨なる産に欣ばしく感ぜられ、爾の慕はしき美德
を奇として、天使の歌を以て宜しきに合ひて爾を神の母として崇め讃む。

ハリストスよ、爾は尊からざる死より衆人に尊きを流し、十字架に釘せらるるに困り
て死に屬する性を以て死を嘗めて、我に不朽を賜へり、人を愛する主なればなり。

ハリストスよ、爾は墓より復活して我を救ひ、我を升せて、爾の父に攜へ、彼と偕に其右に坐せしめ給へり、爾の仁慈の至大なるに因りてなり。

又 イルモス同上

童貞女よ、敬虔なる信者は爾を讚美して飽くことを知らず。神聖なる望より望に進みて、我等常に爾を神の母として崇め讃む。

ハリストスよ、爾は我等の爲に愧を得ざる轉達者として爾を生みし者を賜へり。彼の祈禱に因りて、爾は我等に宏恩を施す仁慈なる神、父より爾に縁りて出づる主を與へ給ふ。

第三調 主日の早課 五三三

第三調 主日の早課 五三四

カタワシヤ

共頌の後に小聯禱。次ぎて、主我等の神は聖なり、及び光耀歌。

「凡そ呼吸ある者」に主日の讚頌。第三調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。

萬民來りて、畏るべき奥密の力を悟れ、蓋ハリストス吾が救世主、太初より有る言は、我等の爲に十字架に釘せられ、甘じて葬られ、死より復活せり、萬有を救はん爲なり。我等彼に伏拜せん。

句、神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

主よ、爾の番兵は具に奇跡を告げたれども、虚しき集會は彼等の手に賄賂を充てて、爾の復活、世界が讚榮する者を隠さんと思へり。我等を憐み給へ。

句、其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

復活の證明を受けて、皆歡喜に充たされたり、蓋マリヤ「マグダリナ」墓に來りて、石に坐する衣の輝ける天使に遇へり、彼言へり、何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる、此に在らず、其言ひし如く復活し、爾等に先だちてガリレヤに往く。

句、角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

人を愛する主宰よ、我等爾の光に於て光を觀ん、蓋爾は死より復活して、人類に救を賜へり、悉くの造物が爾獨罪なき者を讚榮せん爲なり。我等を憐み給へ。

又讚頌、アナトリイの作。同調。

句、鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

主よ、攜香女は涙を垂れて、朝の歌を爾に獻げたり。蓋芳しき香料を攜へて、爾の墓に至り、爾の至淨なる體に傳らんと欲せり。然れども石に坐する天使は彼等に福音せり、何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる、彼は死を滅して、神として復活し、衆に大なる憐を賜へり。

句、和聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

生命を施す爾の墓に於て光れる天使は攜香女に謂へり、贖罪主は墓を空しくし、地獄を虜にして、三日目に復活せり、獨神及び全能者なればなり。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。

七日の首の日、マリヤ「マグダリナ」來りて、爾を墓に尋ねしに、遇はずして、哭きて呼べり、我が救世主よ、哀しい哉、衆の王よ、爾は竊まれたり。生命を報ずる二の天使は墓の中より彼に呼べり、婦よ、何ぞ哭ける、彼曰ふ、我哭く、蓋人我が主を墓より取れり、我其何處に彼を置きしを知らず。此を言ひて、顧みて爾を見て、直

よに呼べり、我が主、我が神よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

エウレイ人は生命を墓に閉せり、然れども盜賊は舌を以て樂を啓きて、呼びて日へり、我の爲に我と共に十字架に釘せられ、我と偕に木に懸りたる者は、父と偕に寶座に坐する者として我に現れたり、蓋彼はハリストス我等の救主、大なる憐を有つ者なり。

光榮、福音の讚頌。

今も、生神女讚詞、「生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり」。

大詠頌。次ぎて讚詞。

今救は世界に及べり。我等墓より復活せし吾が生命の首なる主に歌ふ、其死にて死を滅し、我等に勝利と大なる慈憐とを賜へばなり。

聯禱及び發放詞。



リトゥルギヤ 聖體禮儀には眞福詞、第三調。

ハリストスよ、爾は誠に背きし原祖アダムを樂園より逐ひ出せり。然れども爾、洪恩なる主よ、十字架に在りて爾を承け認めし盜賊、救世主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へと呼ぶ者を其中に入れ給へり。

句、心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。

生命を賜ふ主よ、爾は罪を犯しし我等を死の詛に定めたり。然れども爾、罪なき主宰よ、爾の體にて苦を受けて、死すべき人人、我等をも爾の國に於て憶ひ給へと呼ぶ者を活かし給へり。

句、和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。

主、救世主よ、爾は死より復活して、其復活を以て我等を諸の苦より復活せしめ、死の悉くの力を滅し給へり。故に我等信を以て爾に呼ぶ、我等をも爾の國に於て憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

爾は神なるに因りて、爾の三日の葬を以て地獄に在る殺されし者を活かし、己と共に起し、仁慈なるに因りて、我等衆人、恒に信を以て爾に、我等をも爾の國に於て憶ひ給へと呼ぶ者に不朽を流し給へり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

ハリストス救世主よ、爾は死より復活して、先づ攜香女に現れて、慶べよと呼び、

且彼等を以て爾の友に爾の復活を報らせ給ふ。故に我等信を以て爾に呼ぶ、我等をも爾の國に於て憶ひ給へ。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

モイセイは山の上に手を伸べて、十字架を預象して、アマリクに勝てり。我等皆信を以て之を悪鬼に對する堅固なる武器として受けて呼ぶ、我等をも爾の國に於て憶ひ給へ。

光榮

我等信者は父と子と聖神、唯一の神、唯一の主を崇め歌ふ。聖三者は獨一の日より三光の輝くが如く、我等衆を照し給ふ。故に我等呼ぶ、我等をも爾の國に於て憶ひ給へ。

今も、生神女讃詞

神の門よ、慶べ、身を取りし造物主は此に藉りて出でて、其封印を損はざりき。神聖の雨たるハリストスを抱く輕き雲よ、慶べ、階梯及び天の寶座よ、慶べ、樹蔭繁き斫られざる尊き神の山よ、慶べ。

提綱、第三調。

我が神に歌ひ歌へよ、我が王に歌ひ歌へよ。

句、萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ。

「アールイヤ」、主よ、我爾を恃む、願はくは我世世に羞を得ざらん。

句、我が爲に堅固なる避所となりて、我に常に隠るるを得しめ給へ。